

## ◆ 巻頭言

## 受身ではなく、サポートすることから始まるセーフティネット

## 勝又 幸子

「いざというとき頼りになるものはお金だ」と、老後も貯蓄に励む高齢者がいる。「公的年金には期待できない」と基礎年金保険料を納めない若者もいる。老若男女「不安」だらけで生きている。女性は、男性より長生きする“リスク”など、特有の不安もある。高齢女性はひとり暮らしになる可能性が高いから、健康が損なわれたときいったい誰が面倒をみってくれるのか。家族を頼りにできる人は幸運、他人様のお世話になるのは嫌だと思う人もいるだろう。

そもそも社会保障制度は他人様のお世話をしてお世話をされること、すなわち「社会連帯」で成り立っている。だから世話になる前に、みんなが世話をするを考えれば順繰りにサポートは得られるはずだ。それなのに、ひたすら受身で心配ばかりしている人々がこの国には多すぎる。社会的弱者といわれる高齢者や障がい者と言えども、さまざまな方法で他人様の役に立つことができる。例えば、勤労者の平均収入より多く公的年金をもらっている高齢者は、税金をしっかりと納めて財政を助けることができる。働き方の工夫や職場の援助があれば、働ける障がい者も多くいる。しかし、高齢者に若者のような働きを期待されても困る。これは子育て中の親にも言えることで、毎日残業は困る。それなのに、日本人はお世話する人を増やすための努力をせず、サポートが足りないと嘆いている。

「究極のセーフティネットはサポートする人を増やすこと」だと思う。年金財政は、働いて保険料を納める人を増やすこと、すなわち女性の割合が多い非正規労働者を排除しない年金制度にしなければならない。介護従事者の労働条件を改善して男女ともに就労できるようにしなければならない。そして、女性が安心して子どもを産み育てることのできる社会になれば、おのずとサポートする人は増えるはずだ。



## PROFILE

勝又 幸子  
(かつまた ゆきこ)

国立社会保障・人口問題研究所 情報調査分析部長、厚生労働技官。専門は社会保障財政や社会保障政策の国際比較。近年、障害者保健福祉政策に関する研究で研究補助金を得て調査研究に取り組んでいる。働く母親に育てられた働く母親2世で、育児休業法施行前に産んだ息子が1人いる。